
大学図書館問題研究会 京都

〒607 京都市山科区大宅山田町34 京都橘女子大学 小林倫道気付
(Tel) 075-574-4113 (Fax) 075-574-4122

「新京都府立図書館の建設と京都府の図書館振興を求める会」の活動について

篠原 俊夫

1. 「会」が発足するまで

2年前の阪神大震災で岡崎公園の一角に位置する京都府立図書館が大きな打撃を受けたことは、大学図書館の関係者には周知のことである。府立図書館は明治42年に武田五一の設計により建設されたもので、武田は京都大学人文科学研究所東洋学文献センターや同志社女子大学栄光館、京都市役所等の設計者としても知られている。

もともと老朽化の進んでいた建物は、震災の結果、致命的とも言えるダメージを受け、煉瓦造の3階建ての2、3階部分のほとんどと1階の一部が立ち入り禁止となった。その後、約2ヶ月間休館し、応急処置を施してサービスを再開したが閲覧室の面積は3分の2に縮小された。7月の開館後は比較的平穏に推移するかに見えたが、9月になってから閲覧室の南西角の天井板がはがれ、煉瓦が落下し、再び1ヵ月たらずの閉館を余儀なくされている。そのような状況下で7月には京庫連、図書館問題研究会（図問研）京都支部京都府職員労働組合（府職労）教育支部図書館分会との懇談会が開かれ、8月には会結成に向けて、よびかけ人又は賛同者を募った。8月の末には、「新府立図書館の建設と京都府の図書館振興策を求める会」（準備会）を結成した。10月22日には、同志社同窓会館において、図書館利用者・学生・文庫関係者・公共図書館員・大学図書館員など、幅広い層の人々がつどい、新しい京都府立図書館の建設を求めて、運動を進めてゆくことを確認した。また、この集いをもって、「新府立図書館の建設と京都府の図書館振興を求める会」は正式に発足したことになる。おそまきながら、大学図書館問題研究会京都支部と私自身がそれぞれ団体と個人の部のよびかけ人に加わったことを報告しておきたい。ただ、これまでのところ、これというお手伝いができず、名目的な参加にとどまっているのが、実情である。

2. 主な活動について

「会」が正式に発足する前から、連絡世話人会が中心になって、「学習会」を開催したり、府議会文教委員や社会教育課、マスコミへの働きかけなどの活動が行なわれていた。地元の京都新聞をはじめ、毎日、朝日等の主要な新聞にも何度か、新府立図書館の建設

に関連する記事が掲載され、地味ながら、市民の関心も高まってきたと思われる。

マスコミに取り上げられることで、問題の在りかが理解され、運動が広範な市民のサポートを得るきっかけとなる。市議会への請願のために署名も取り組まれ、昨年12月12日には、「新京都府立図書館の建設、ならびに京都府の図書館振興に関する要望」を京都府知事および府当局に署名をそえて提出した。しかし、2月9日に荒牧知事が記者会見で明らかにした構想は、新たな適地を見付けて、十分な規模を確保しようというのではなく、現在の府立図書館を全面的に改築するというものであった。府のプランの概要は、以下のようなものであった。

1. 1996年度に基本計画を策定する。そのための費用として2000万円を計上した。
2. 2000年度をめどに開館をめざす。
3. 総合資料館の蔵書約60万点と府立図書館の蔵書約40万点を一本化する。
4. 府立及び府内の市町村立図書館の蔵書目録をデータベース化し、コンピューターシステムを活用した図書館情報のネットワーク化を図る。
5. 近くの市町村立図書館から府立の蔵書を検索し、貸出の予約ができるようにする。
6. 文部省の「学術情報センター」にもアクセスできるようにする。

ここで一番問題となるのは、言うまでもなく、現在地の敷地に十分な面積を確保できるのかという懸念である。現在の府立図書館の敷地面積は、3740㎡である。一方、京都家庭文庫地域文庫連絡会の原案をもとに、これまでに会に寄せられた意見を集約して、事務局で作成した「わたしたちの望む府立図書館」にもりこまれた案では、床面積は2万㎡以上となっている。仮に容積率を大幅に緩和しても、現在地に2万㎡以上の図書館を建設することは不可能である。

もうひとつの問題は、歴史的建造物としての現在の府立図書館を保存すべきではないかということである。「京都の近代建築を考える会」の作成した「岡崎の京都府立図書館—その保存・再生に向けて：私の想いそして意見」には、それぞれの立場から現在の建物を保存すべきだとする声が多く寄せられている。京都府の構想では、「図書館の正面外壁を保存して残りは改築。この場所で新しい図書館を建設する」としてゐる。これは類似の方法がとられているケースはめずらしくはないものの、保存方法としては中途半端な代物であり、新しい世紀に向けて構想された図書館としてはどんなに手を加えたとしても、いかにも手狭である。一番望ましい選択は、妥協の産物としか見えない正面の壁面のみを残す形の現地建て替えより、十分な面積の新図書館を建設可能な適地を別に求めるべきだということになる。立地についても京都市内に限定せず、京都府下全域のバランスからみて、いっそ福知山あたりに新図書館を建設すべきだする意見もある。

3. のぞましい府立図書館の建設にむけて

蔵書目録をデータベース化し、コンピューターによるネットワーク化をはかることや、マルチメディア対応型の図書館をめざすことは、21世紀を展望する図書館のレベルでは、当然のことで特筆すべきことでもない。問題はネットワーク化をはかるという一点を強調しておけば、すべての問題が解決されるかのような錯覚を与えかねないことである。無論ネットワークはこれからの図書館サービスに不可欠の要素であるが、万能薬ではないし、

図書館が満たすべき基本要件を疎かにするための口実に使うべきものでもない。

敷地面積が不足して、将来にわたる増加図書の収容を前提とした規模の新図書館を断念した結果が、開館時点の100万冊を収納するだけが精一杯で、開館するや次の書庫をどこかに求めなければならなくなったり、閲覧スペースがたりないから結果的に60席しか設けられないことの言い訳に非来館型の図書館をめずすというのは、本末転倒の話というべきで誰も納得しない。大体、ネットワークで結ばれていれば、市民が来館しなくてよいという短絡した発想はどこから生まれてくるのだろうか。滋賀県立図書館を頻繁に利用して、恩恵をこうむっている一滋賀県民の経験から言わせてもらえば、蔵書が充実した図書館にでかけて、書棚を丹念に探して、思いがけない掘出物の本を発見する喜びはなにものにも変えがたいものがあるのである。滋賀県立図書館がネットワークを口実に現在の充実した書棚を放棄したら、私が県立図書館にでかける理由はなくなってしまう。コンピュータがカウンターにずらりとならんでいて、なにか欲しい本があったらどこから取り寄せますよと言われて、なるほど最先端の図書館サービスだと感心したり、積極的に図書館に出かけたいとは少なくとも私は思わない。

子供が楽しい読み物を見つけるために気軽にゆける図書館であり、退職後の有意義な余暇の過ごしかたとして、専門的な読書をはじめたいと考えている年配のサラリーマンにも満足できる図書館を建てて欲しいと思う。そのために何ができるかを考え、ささやかでも協力してゆきたい。なお、この文章は「新京都府立図書館の建設と京都府の図書館振興策を求める会会報」No. 1-7 (95.10.26-96.10.16)および「岡崎の京都府立図書館—その保存・再生に向けて：私の想いそして意見」（京都の近代建築を考える会編 1996.10）によるものであることをお断わりしておく。（しのはら・としお／京都大学法学部図書室）

支部委員会だより

第6回 於・同志社大学クローバーハウス／1月14日(火)午後7:00～

【主な議題】

- ① 支部報編集内容について（2月号、3月号）
原稿依頼状況の確認、掲載内容の調整。
- ② 支部委員の補充について
京都橘女子大学から田北氏が候補に。
- ③ 各大学より実情報告
立命館大学図書館の例会実施状況、同志社大学の勤務時間延長問題、京大総合人間科学部大学院棟新築なる、京都学園大学の土曜休暇問題、等。
- ④ 日図協評議員選挙について（票読み）
- ⑤ 近畿5支部合同新春例会について
参加予定者の確認、感想文執筆者候補の選定。

出席者：篠原、竹本、大館、井上、堤、小林、田北（顔見せ）

パソコンによる図書館業務研修会は散々だっにも拘らず、この企画は想像もしなかった副産物をもたらしました。前述の「京都地区芸術系図書館担当者研修会」へと繋がったのです。研修最終日、「せっかく芸術系の図書館の人が集まったのだから、これで終りにせず、継続した研修会にしていけないか。その中で図書館業務の機械化についても継続研修して行きましょう」の声が上がりました。京都地区の図書館の方とはほとんど無交流でしたから、とてもうれしかったのを覚えています。

ともあれ会場は持回りで、内容は大きなテーマを決めるのでなく、その時々に出た事柄を、実務レベルで研修していくと取り決め、継続していくことにまとまりました。

早速次回は成安短大で開催することに決定（2回目以降精華大不参加）。

《研修会の歴史》

時間の経過とともに大学を取り巻く状況も変化するのは当たり前で、この研修会もいろいろ変遷しています。京都芸短・成安短大ともに4年制大学が出来た事、図書館が総合情報センター的役割を担う施設としての位置付け等、諸々の事情から開催出来なかった年や、2校のみの研修会もありました。忘れていましたが第6回までは、2日間の研修会を開いています。第11回からは池坊短大が参加、昨年（1996年）の第12回には京都造形大学の児童図書館・成安造形大の初参加があり、人数も14人とこの会始まって以来の盛会でした。（この会については後述）

《研修内容》

さて、研修内容かというと、極めて実務レベルでの研修ということから、情報交換がメインになっています。各館の状況、個人の仕事内容、疑問点、工夫している事など、多岐に渡って話し合い、意見交換しています。肩ひじ張った研修会ではないので、気楽に話が出来るのがいいのではないかと思います。

その他には次のような事柄がテーマになっています。逐次刊行物の収集・分担保存、視聴覚資料の収集・管理、図書館利用教育、コンピュータによる図書館業務処理、学術情報センターについて、大学センターの現状等々。その時々々の世相を写しているなど感ぜずにはいられません。

《成果・収穫》

ここでの大きな成果は、参加館の逐次刊行物目録を編んだことでしょうか。第2回から逐次刊行物の分担保存の件が議題に上っており、まず雑誌と年鑑を、後に紀要も含めて各館の所蔵調査を行ないました。それらを突き合わせて目録にしたものです。第4回で分担保存の可否を問いましたが、自館で持っていた資料は何処も同じということが解り、分担保存は難しいの結論に達しました。機械化が進んだ館、進まない館と取り巻く状況も違い、まして日常業務をこなしながらの取り組みですからよくやったものだと思います。

もう一つの収穫は、支えあっている実感とでも言った方がいいのか、そういう関りが保てている事です。些細なことでも問合わせができるのはもちろんですが、顔が見える、人と

なりが解って話が出来るといのは素晴らしいことです。それに、同じ芸術系図書館でも事務の取り方一つとっても違いますから、この研修会からお互いに学びあえた部分はまことに大きいものがあります。

《第12回のこと・若いエネルギー》

第12回は8月30日に嵯峨美で開催しました。

ここでメインテーマになったのが「逐次刊行物の分担保存の可能性は」というものでした。第11回の席で、図書館を取り巻く状況も変化している現状から、今一度分担保存をも含めて議題にしてはの意見が出されテーマになったものです。事前準備として各館の逐次刊行物所蔵調査を行ない、目録を作成しました。分担保存に関しては、今回もスペースの問題・責任問題等があつて難しいという結論に達しました。逐次刊行物については、若い方から「今回初めて逐次刊行物所蔵調査を行なったがとても勉強になった。是非毎年調査して、目録を更新していきましょう。」という発言がありました。日常業務の中では中々出来ることではありませんから、二の足を踏むのですが、最新情報が把握でき利用できるという意見もあつて、雑誌・年鑑は毎年、紀要は5年毎に所蔵調査し、目録を更新していく事に決まりました。若いエネルギーに引張られた圧倒された会でした。

《これから》

図書館員も人事異動等ですいぶん代わりました。成安短大の秀平さんも停年退職されて最初からの会のメンバーはたった2人になってしまいました。若いメンバーからは、この研修会をもっと頻繁に開いて欲しいとの声も出ています。若い方達にどんどん牛耳っていただいて、楽しく、又、意義ある研修会に出来たらいいなと思っています。

ということで今回は成安短大の前川ひろみさんに「バトン」を託します。

「数珠つなぎ」のルール

- ①内容は硬軟自由。②原稿量も1ページ程度以上で自由。③執筆者には次回執筆者を指名する義務があります。④指名された人はもちろん拒否権なし。

目次	<p>「新京都府立図書館の建設と京都府の図書館振興を求める会」の活動について (篠原俊夫) 1頁</p> <p>支部委員会だより 3頁</p> <p>大図研京都数珠つなぎ⑬ 4頁</p>
<p>支部報に関するご意見は最寄の支部委員または編集気付 (京都橘女子大学 ☎075-574-4113 (FAX 075-574-4122) ♥ PXX01651@niftyserve.or.jp またはNIFTY-Serve:PXX01651小林) まで</p>	